

佐久市中心部における仏教寺院の機能変遷

— 地域文化の拠点としての寺院 —

益田理広・新井悠司・川口志のぶ・欒 雅蓉

本研究は、佐久市中心部における仏教寺院の文化的機能に着目し、江戸時代から明治の廃仏毀釈を経て現代に至る中で、それがいかなる変遷を遂げたのかを明らかにしたものである。日本の仏教寺院は徳川幕府によるキリシタン禁制と相表裏する形で、国民の戸籍管理に等しい機能を付与され、地方行政の一端を担うことになるが、佐久市中心部について見た場合、各寺院は「供養」「祭礼」「寺子屋」を通し、一地域内の産業から防災に及ぶ広範な情報集約、帰属意識の醸成、公教育と新知識の伝達を行う、地域文化の中心でもあった。ところが、明治維新に伴う廃仏毀釈運動は、こうした寺院の機能を剥奪してしまう。本稿では、それらの機能は完全には停止せず、寧ろ補完的な教育や、アイデンティティの強化、住民の日常的な情報収集による地域コミュニティ維持のために「辺縁化」したことを指摘し、寺院の文化拠点としての地域との関係を考察した。

キーワード：仏教、寺院、地域コミュニティ、地域文化、佐久市

I 序

I-1 研究の背景および目的

日本を含む漢字文化圏に対して、仏教、特にいわゆる大乘仏教に属する諸派の及ぼした文化的影響は論を俟たず甚大である。紀元前のインドに端を発するこの教学は、周辺諸国に広く伝わり、日本にも六世紀中葉に中国および朝鮮を経由して伝来する。その後、現在に至るまで様々な変質と発展を遂げつつもなお日本文化の中心として命脈を保っているのは誰もが知る事実であり、その大体でさえも、少なくとも奈良朝の南都六宗に見られるような学問的性格、平安期の真言宗・天台宗の持つ宗派的性格、そして鎌倉期に続出した浄土教や禅宗、日蓮宗等の大衆的性格をあわせ持つなど複雑で、その姿を一筆に描くことは不可能に近い。それどころか、その千年を超える受容の歴史は、儒学や神道のような他の宗教学問との混淆と対立、また詩歌書画一般から能楽、茶の湯等の諸芸との融合を生み、更には農耕に関わる祭礼や各

地の村落に伝存する地域行事、あるいは私ども個々人の日用の細かな所作すらも規定するほどに、この国の文化を浸食しているのである。そして江戸期に至っては檀家制度の制定と寺子屋の発達によって、その権能は各地方の戸籍管理や初等教育といった行政機能に及び、結果、国家全体から一集落までのあらゆる地理的範囲において、一種の文化基盤と化している。

こうした仏教の日本文化における地位は、それ自体の特質を捉えることの困難を示しもあるが、一方で、地誌学のような数多の要素に対する総合的な分析が求められる学問においては、それらの要素の核となる存在として大いに有用となると予測される。殊に市町村規模の分析に際しては、近世期における無二の文化中心として、仏教あるいは仏教寺院の存在は重要となる。ところが、これまでに行われた仏教および寺院に着目した地理学的研究は、地域社会の側がいかにその寺院や「聖地」を活用もしくは形成するかに主眼が置かれており（島津，1990；森，2001，2002など）、寺院

自体の機能や地域社会・文化に占める位置について論じたものはごく僅少であった。現在のところ、このような研究に該当するものには、藤村（2005）の福井県嶺北地方の集落についての分析や、卯田ほか（2013）の富山県入善町の事例があるのみであり、決してその蓄積は十分とは言い切れない状況にある。

そこで、本研究では、長野県佐久市中心部¹⁾における仏教寺院の文化的機能に着目し、それがいかなる変遷を遂げ、また地域住民の生活にどのように関与してきたのかを把握する。そしてそれによって、仏教寺院が地域コミュニティの中心としての機能を有していることを明らかにする。

なお、市内には中込・野沢、岩村田、および旧望月の3つの中心核が分散して存在するが、本研究では、古くから千曲川との密接な関係下で人々の生活が営まれてきた、比較的平坦な地勢が特徴の中込・野沢地区一帯を中心部と定め、調査を行った。

なお、本研究は2013年10月および2014年4月、5月において行った仏教寺院に対する聞き取り調査によるものである。

1-2 研究対象地域

本研究の対象地域である佐久市は長野県北東部、標高600~1,000mに位置する佐久平（佐久盆地）主要部にあたる。市の中央には千曲川が貫通しており、東は群馬県境の荒船山、西は大河原峠に限られ、南は佐久穂町、北は東御市や小諸市などに接する。内陸性気候のため気温の年較差、日変化ともに大きく、水稻のほか果樹や野菜の生産が盛んである。

中山道と佐久甲州街道²⁾の会合する佐久市は古くから交通の要衝として発達しており、1997年には北陸新幹線³⁾の停車駅である佐久平駅が設置され、東京駅と約1時間で結ばれることとなった。高速道路網の整備も進み、群馬県の藤岡市で関越自動車道から分岐し、長野市を經由して新潟県の上越市に至る上信越自動車道が横断するほか、隣接する小諸市の佐久小諸ジャンクションから南下

して中央自動車道を経由し、静岡県静岡市清水区へ至る予定の中部横断自動車道の一部区間が開通している。佐久市内においては上信越自動車道上にETC専用を含め2カ所、中部横断自動車道上に3カ所のインターチェンジが開業⁴⁾している。佐久市ではこれら交通網の整備もあり、首都圏や中京圏、京阪神を結ぶハブとして製造業を中心とした産業集積が進行している。

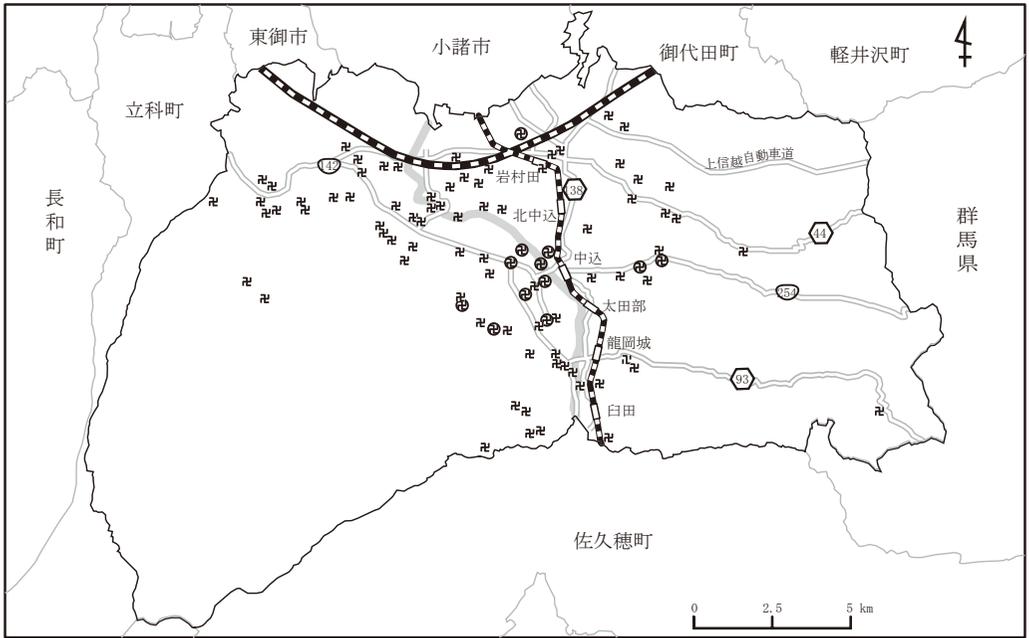
現在の佐久市の原型は1961年に浅間村、東村、野沢町、中込町が合併して発足した旧佐久市に求められる。更に2005年には白田町、浅科村、望月町と合併、現在の版図を得、長野県内の3市4町および群馬県内の1町1村と接している。

その2005年の市町村合併時点における佐久市の人口は101,393人であったが、直近9年間は毎年平均150人前後、約0.2%ずつ前年を下回り、2014年には99,996人⁵⁾に減少している。しかしながら周囲の県内3市に比較した人口規模は依然大きく、（茅野市55,595人、東御市30,974人、小諸市43,504人⁶⁾）、東信地域の中核的都市である。近年の年齢階級別人口構成は0歳~14歳が13.5%、15歳~64歳が59.3%、65歳以上が27.3%（うち75歳以上は15.0%）であり、生産年齢人口よりも高齢者および後期高齢者人口が漸次増加する傾向にある。

市の産業別従事者数は第1次産業が4,686人、第2次産業が14,790人、第3次産業が28,136人と⁷⁾、農業が卓越する地域でありながらも製造業従事者と都市的産業従事者の割合が高い。

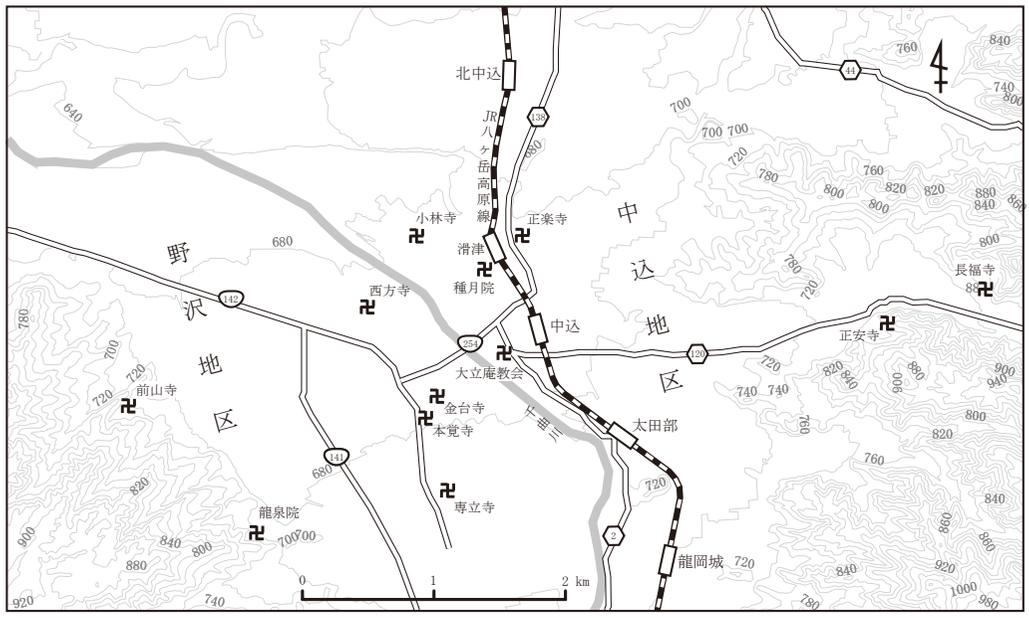
佐久市内の仏教寺院の分布を第1図に、調査を行った佐久市中心部の寺院の所在を第2図に示す。分布の様子を概観すると、中込地区や野沢地区など千曲川沿いの平地では川から一定の距離を保った線上に寺院が立地する傾向がある。この地域では過去幾度も河川氾濫の危険に晒されてきた経緯から、千曲川との距離は氾濫域にあたりと考えられる。

他方、盆地を囲む扇状地の麓付近への寺院の分布も顕著である。集落からほど近いが微妙に標高が高いことで集落の連続性から切り離されるその



- | | | | |
|--------|-------|-------|-------|
| 卍 寺院 | —— 河川 | == 県道 | □ 長野県 |
| ⊕ 調査寺院 | —— 鉄道 | == 国道 | □ 佐久市 |

第1図 佐久市における仏教寺院の分布状況



- | | | |
|--------|---------|-------|
| 卍 寺院 | —— 河川 | == 県道 |
| ⊕ 調査寺院 | —— JR 駅 | == 国道 |

第2図 研究対象地域および調査対象寺院

地勢は、仏教寺院のもつ宗教的機能と行政機能の双方の要求を満たす好立地と言えよう。また図からは、街道に面した高台への寺院の分布も判読できる。そこは扇状地の麓にもあたるが、街道を見下ろすため軍事的に重要な意味をもつ場所である。

市内には複数箇所に寺院の分布しない領域が確認できる。第2図の中央部は人口が集中する中込および野沢地区であるが、その北西側には水田地域が広がり寺院の立地が要請されるような規模の集落は確認できない。南側の空白地帯も同様である。また同北東部は市内北部の岩村田地区から急激に下る斜面にあたり、近代以前は地域間の緩衝地帯としての性格を持つ土地であったと考えられる。

II 佐久市の中心部の仏教寺院

II-1 佐久地方の仏教史概観

日本の仏教は中国から朝鮮半島を経て伝来した外来宗教であるが、時代の進展とともに仏教文化が定着し、日本人による独自の仏教が創唱されるに至った。渡来僧や遣唐使が伝えた奈良時代の南都六宗、平安時代の最澄や空海による天台宗や真言宗は貴族階級を中心に広まったが、後の鎌倉時代には法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、一遍の時宗、日蓮の日蓮宗、栄西の臨済宗、道元の曹洞宗などが庶民の救いへの願いに応える仏教として生まれた。

中世以前の仏教寺院の領有地は広大であり、その守備上の必要から軍事的機能をも有していた。また戦時には普段は百姓などを行っている平民を兵力として動員するにあたり、寝食の場所が確保できること、墓石など軍事転用可能な資材が豊富であることから、寺院は軍事的に利用価値の高い施設でもあった。しかし仏教寺院は、戦国時代から安土桃山時代の社会混乱期に勢力が増大し過激化したことで織田信長および豊臣秀吉による弾圧を受け、続く江戸幕府では寺院諸法度の厳しい統制下に置かれ、軍事力を削がれてゆく。また幕府の

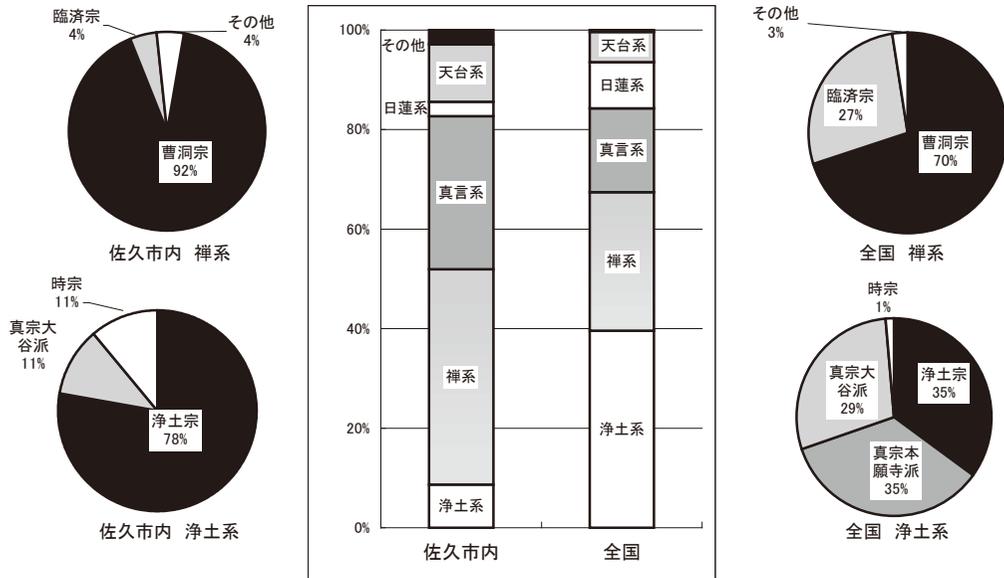
キリシタン禁制に伴い、全国民の仏教寺院への所属を確認する寺請制度が整備され、それによって仏教寺院は戸籍管理に相当する末端行政機関としての性格を有するようになった。しかし明治維新後の廃仏毀釈運動により、仏教寺院は政治的機能と経済的基盤である領地の多くを失うに至っている。

全国の仏教寺院や納骨堂、墓地情報を提供する企業がウェブ上で公開するリストによれば、現在、佐久市内では100余軒の仏教寺院の情報が掲載されている⁸⁾。ただし近年は無住や兼任が進行し、実際に存立している仏教寺院数は80余軒程度であることが聞き取り調査によって判明している。

佐久市内の寺院全体に占める各宗派の比率は第3図の通りである。佐久市内においては全国の宗派比率とは異なる特徴が見られる。特に浄土系諸宗の比率が著しく低い点は特筆に値する。浄土宗、浄土真宗、時宗の各派を有する浄土系仏教は、全国では寺院数の39.6%を占め最大勢力となっており、曹洞宗、臨済宗、黄檗宗に代表される禅宗は27.8%とそれに次ぐ。しかし佐久市内においては浄土系が8.7%、禅系が43.3%であり、前者の比率が著しく低く、特に国内最大規模を誇る浄土真宗の勢力が弱い。なお、後者の禅宗寺院45軒中、曹洞宗は41軒を占め、当地最大の宗派となっている。

中世以降、武士層の厚い保護をうけた曹洞宗は全国的に繁栄したが、当地で曹洞宗がこれほどの勢力を得た原因については、当地を支配した伴野氏の菩提寺が曹洞宗であったこと、また曹洞宗を篤信した武田信玄の進軍があったことに求められる。後者は甲州韮崎宿から佐久甲州街道を北上する上州経略と呼ばれる歴史現象であり、この進軍の途上にある有力寺院において武田家ゆかりの曹洞宗へと宗派替えが起こったことが指摘されている⁹⁾。

このような佐久地域において、毎年8月1日の墓参りと位牌分けの風習は、宗派を超えて共通して見られる特徴である。この日付については、聞き取りにおいては徳川家光の出生との関係があるという説も窺われたが、一般には1742年8月1日



第3図 佐久市内の寺院における宗派比率（2014年）

に発生した千曲川の大氾濫に起因する風習であると考えられている。戊の満水と呼ばれるこの氾濫では、甚大な人的被害を生じた記録が随所に残る。そのため佐久地方では8月中旬の盂蘭盆会とは別に、この日に墓参する風習が生まれたという説が有力な民間伝承として語り継がれている。また上杉（1991）によれば位牌分けの由来自体は定かでないものの長野、栃木、群馬、山梨、愛知、神奈川など関東と中部の一部地域での慣行が確認されている。しかしながら佐久における位牌分けに関しては、周囲と隔絶された盆地という地理条件が人々の往来を困難にしており、結果的に位牌を複数作成して各家で供養するようになったという可能性もある。なお各寺院いずれにおいても、これらの風習は千曲川の上流域から佐久を中心とした地域に特有の、自然条件のもたらした存在であると認識されている。

II-2 佐久市中心部の仏教寺院

本研究の対象地域には約30軒の仏教寺院が存在する（第4図）。本研究ではその内の13か寺（文書回答1カ寺を含む）において聞き取りを行った。調査内容は主な年中行事、寺院が有する組織と関

連する外部組織の有無、教育的機能の有無についてである。その結果、8月1日の墓参は宗派や千曲川の氾濫による直接的な被害の有無によらず、全ての仏教寺院においても年中行事として行われている様子が判明した。同様に位牌分けの風習への言及も多数の寺院において確認できた。また各寺院はそれぞれの護寺会等の組織を有するほか、佐久仏教会に加盟し他寺院との関係を持つことも明らかとなった。佐久仏教会では春に地区輪番制で稚児行列を開催するほか、老人施設への慰問活動等を行っている。更にこのような超宗派組織以外にも、宗派によっては地域的な組寺組織がみられることがある。これは本末関係とも呼ばれ、ひとつの本寺と複数の末寺から成る親子関係にも似た互助形態に特徴がある。地域の本寺はより広域を管轄する本寺の末寺でもある。末寺から本寺を遡ると本山に至るピラミッド型の寺組織であり、当地においては曹洞宗に顕著であるほか、天台宗や黄檗宗にもみられる。また現在は教員と住職の兼業が実質的に不可能であるものの、聞き取り調査に応じた多くの寺院においては、過去に教員と住職を兼業していたこと、地域の中核を担う教育機関として機能していたことも判明した。これら

宗派	本山	寺院名	本寺	末寺	7C	9C	11C	13C	15C	17C	19C	21C
真言宗 智山派	智積院	前山寺									1903	合併
		長命寺										
		薬師寺										
		仙翁寺										
		園城寺										
		専立寺										
		福壽院										
		小林寺										
		神宮寺										
		延命院										
		定光寺										
		浄土宗	知恩院	西方寺		○						
常光寺												
時宗	清浄光寺	金台寺		○								
曹洞宗	永平寺 総持寺	正安寺	○									
		貞祥寺	○									
		宗福寺		○								
		本覚寺		○								
		龍泉院		○								
		大林寺		○								
		清久寺		○								
		西光寺		○								
		大昌寺		○								
		種月院		○								
		中善寺		○								
黄檗宗	萬福寺	禪昌寺		○								
天台宗	延暦寺	長福寺	○									
		正楽寺										
日蓮宗	久遠寺	大立庵教会										

第4図 佐久市中心部の寺院の建立年代および本末関係（2014年）

の詳細は以下に調査事例として宗派別に示すほか、第1表に整理して掲載する。なお情報は主に聞き取り調査を元としているが、一部、佐久市観光交流推進課による「佐久の寺院巡り」に掲載の寺院紹介記事¹⁰⁾、各寺院発行のリーフレット、および佐久仏教会に加入する寺院の紹介をまとめた刊行物¹¹⁾を参照した。

1) 真言宗智山派

真言宗は天台宗とともに平安期より繁栄した宗派であり、そのうち京都智積院を本山とする智山派は、現時点で無住となっている可能性が高い数件を含めると、調査対象地域に10軒ほど存在する。西暦800年代ごろに創建された龍覚寺に由来し、市内で最も古い歴史を有する前山寺も同派に属す

第1表 佐久市中心部の寺院の年中行事・教育的事業（2014年）

宗派	寺院名	聞き取り資料で言及された主な年中行事 (春秋の彼岸以外のもの)				聞き取り資料で言及された 教育機能
		4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	
真言宗 智山派	前山寺		施餓鬼会		新年 入寂日	先代は教員
	専立寺		施餓鬼会		年始法度	寺子屋「達道学校」は野沢学校の前身 「屋間学校」主催 学習塾経営
	小林寺	水子供養	施餓鬼会	清掃奉仕 (婦人部)	新春護摩祈願	寺子屋から成知学校へ変遷 同族から中込学校長を輩出
浄土宗	西方寺	踊念仏実演				
時宗	金台寺					寺子屋の可能性あり 寺が学校として利用された
曹洞宗	正安寺	大般若祈禱 花祭り	一夜接心会 施餓鬼会		年越し 新年祈禱 入学児童祈禱	民生委員・保護司を経験 寺子屋の可能性あり 1980年頃まで学生の座禅会盛ん
	本覚寺	出世地藏尊供養 花祭り 新生児法要	施餓鬼会			先代は教員 大規模な寺子屋 2000年頃まで子供が勉強合宿
	龍泉院	花祭り	施餓鬼会			教育学部出身者在籍 先代は教員 3年間保育園を開業 40～50年前は寺で子供が勉強
	種月院	花祭り	芸術展 寺院開放 施餓鬼会	人権学習会		教員・保護司・人権擁護委員・民生児童委員 を経験 先代は教員 寺子屋(敷地内に筆塚あり)
天台宗	長福寺		地藏盆会 音楽祭		年越し	先代は教員 書道教室
	正楽寺	花祭り			修正会	PTA役員・青少年補導員・保護司を経験 楽器練習場として寺を利用 先代は書道教室主宰
日蓮宗	大立庵 教会	花祭り		七五三祈禱屋祭	初祈禱 節分	育成会役員を経験

る。調査対象地域では真言宗智山派の寺院は中世から近世を通して漸増するが、1600年代になると、わずか50年ほどの間に4寺が創建された。これは幕府の禁教令および寺請制度に対応した増加と考えられる。

調査を行ったのは比較的平坦な地勢で人口が集めた地域であり、そのため寺院が子供の教育にあたり中心的役割を担ったケースが多い。真言宗智山派においては小林寺と専立寺がその典型である。小林寺は16世紀後半に武田家の家臣が開いた

庵に由来し、1742年の千曲川流域で発生した大洪水で流出寸前となったものの、古くから寺子屋として村内外から寺子を集めていた。明治期の学制発布後しばらくは「成知学校」が小林寺を仮校舎として運営されており、のちに「中込学校」を経て現在の中込小学校へと変遷した。また16世紀後半に開創された専立寺は野沢の平地に立地し、19世紀後半の小学令発布まで野沢小学校の前身として多くの子供が学んだ経緯がある。

前山寺での聞き取り調査によると、正月に境内に集合する近隣住民に札を配るほか、2月15日の釈迦の入寂日には「やしようま」を供え、5月に花祭り、盆には棚経と施餓鬼会を行うなどの年中行事が存在する。その他に奉仕作業がある。小林寺では1月上旬に新春護摩祈願祭、6月の水子供養、9月上旬のお施餓鬼法要などが、また専立寺では元旦の御年始法度、春秋の彼岸会、8月の大施餓鬼会などが行われる。

2) 浄土宗・時宗

浄土宗は京都知恩院を本山とし、浄土真宗、時宗の源流ともなった宗派である。また時宗は藤沢の清浄光寺（遊行寺）を本山としている。浄土宗・浄土真宗・時宗は、教理的には同一の基礎を有する「浄土教」であり、阿弥陀仏崇拜、称名念仏の励行等の共通した特徴を持つ。調査対象地域には浄土宗に属する寺院が2軒、時宗に属する寺院が1軒存在するが、佐久市は一遍による踊念仏創始の地ということもあり、浄土宗寺院であっても時宗および一遍との関わりが強い。そこで、ここでは浄土宗と時宗を一項目の内に扱う。なお、浄土真宗は国内最大の勢力を有する仏教宗派ではあるが、佐久市内には所在していない。

まず時宗について述べる。野沢の金台寺は佐久市唯一の時宗寺院である。金台寺は1279年創立の寺院であり、野沢の平地に立地する。この寺院は鎌倉時代にこの地域を支配していた伴野太郎時信により、一遍を記念して建立されたものである。一遍の親族は承久の乱の際に後鳥羽院側にあり、朝廷の敗北とともに叔父が佐久の地に流罪となっ

たという。一遍本人はその際、浄土僧として出家し難を逃れるのであるが、その後、法然の孫弟子に当たる大宰府の聖達上人に師事、熊野において修験者との交流を通して称名念仏の絶対を悟ることになる。そして、叔父を弔うために佐久を訪れた際に遂に踊念仏を創始するに至るのである。この踊念仏は先述の伴野太郎時信に非常な感銘を与え、当寺建立の契機となった。金台寺はこのような経緯を有するために、時宗において非常に重要な地位を占め、遊行自体が終焉を迎える昭和初期までの長い間、遊行上人（時宗法主）遊行の際には必ず立ち寄るべき宿泊寺とされていた。

次に浄土宗であるが、この宗派に属する寺院の内、調査を行ったのは西方寺である。本寺は1617年に西念寺（岩村田）の末寺として建立された。建立の経緯は、千曲川氾濫時に往来ができなくなる跡部の檀家の要請によるとされ、自然条件の強い影響が垣間見られる。しかし、本寺の著しい特徴は、何よりもこの寺院の立地する跡部地区にのみ伝わる「踊念仏」である。佐久に始まり、かつては日本全国に盛んに行われ、阿波踊りをはじめとした種々の舞踊にも影響を与えたとされる踊念仏も、現在においてはこの西方寺を他にしては実見することはできない。

本寺は毎年4月の第一日曜日に踊念仏の公開実演を行っている。踊念仏については、その古形は一遍聖絵や金台寺に伝わる一遍上人絵傳（重要文化財、現在は東京国立博物館に管理を委託）などに拠る他はないが、明治頃までは跡部地区に限らず全国に散在していたらしい。特に佐久市一帯には跡部のものと良く似た踊念仏が伝わっており（鹿踊り等）、また望月地区にも「念仏踊り」（一遍との関係を有さない）が残存する。こうしたことから、跡部の踊念仏には地域の習俗などの要素が多分に混在している可能性も指摘される。しかし、その根幹は明らかに一遍に由来するということが絵伝や聖絵から明らかである。

また、踊念仏はあくまで跡部地区に伝わるものであることも強調されるべきである。その祭礼自体は西方寺にて行うが、それを伝え保存してきた

のは常に跡部地区の住民であった。確実な記録としては1850年頃の「助念仏」に遡ることができるという。当時八十村以上が物資を持ち寄り、三日三晩踊り狂い遊行上人を迎えたのである。こうしたものの内、唯一跡部のもののみが、その創始の地であるということに加え、住民の温厚典雅な性質と相俟って残存したということであった。この地には一遍上人の教えが根付き、そのために河川改修等も可能となったのではないかと住職は言う。

3) 曹洞宗

13世紀に開かれ福井の永平寺と鶴見の総持寺を本山とする曹洞宗は中世に武士層からの厚い保護を受けた。佐久地方では16世紀半ば以降の武田軍の侵攻による宗派替えや高僧の輩出もあり、とりわけ曹洞宗が繁栄した。この16世紀後半以降から17世紀の寺請制度による寺院新設を通じて佐久市内で創建されたとみられる34寺のうち、実に16寺が曹洞宗¹²⁾であった。現在でも曹洞宗は市内最多の寺院数を擁する宗派である。調査地域には2軒ほど無住あるいは兼任の可能性のある寺院があるものの、それらを含め10余軒の曹洞宗寺院が存在する。

曹洞宗は本寺と複数の末寺から成る「本末関係」と呼ばれる組寺制度を有する。これは本山からの連絡事項を効率的に伝達するほか、宗務や仏事などを協働するための単位でもあり、宗派内の結び付きを強固にする。前述の通り、ある地域の本寺はより広域を管轄する本寺の末寺にあたり、全体では本山を頂点としたピラミッド構造となっている。聞き取り調査からは、現在の組時内における仏事協働の一例として、8月末～11月ごろに施餓鬼会を輪番で行うことが明らかになっている。これはその年の死者の法要を主目的としており、同時に貧者への祈りを行うものである。また別の組寺内では、組寺全体で行う道元禅師の誕生供養や死亡供養に、檀家の役員が参加することがあり、また組寺内で道元哲学の勉強会も行われている。

内山の山麓に立地する正安寺は市内の曹洞宗寺

院として有力で、貞祥寺と双璧をなす。正安寺は11世紀前半の平安時代に群馬との県境で創建された後に一度移転し、16世紀半ばに現在の場所に建立された。元は天台宗、のちに臨済宗であったが16世紀初頭に武田信玄の家来筋が住職になったことで曹洞宗へと宗派替えがなされた。また16世紀半ばには北上した武田信玄により「甲守」の山号を与えられており、甲斐の影響が強くみられる寺院である。正安寺は付近の末寺6寺をまとめる本寺であるが、正安寺自体も東御市の定津院の末寺にあたる。曹洞宗への宗派替え後、有力寺院として現在まで一貫して巨大な経営規模を有する正安寺では、教育分野よりも政治的、経済的側面における種々の要請が強かったであろうことは容易に推察できる。しかしまた、それほどの規模を持ちながら、なぜ教育機関としての地位が佐久地域内では相対的に低かったのかという点については、主にその地勢に起因するものと考えられる。正安寺が立地する内山は調査対象地域の版図の縁辺に近く、群馬からの主要街道沿いではあるものの、狭隘な峠道を下ってきた山麓にあたる。扇状地の発達も限定的であり、野沢の平地ほど人口集積が見られなかったことから、正安寺では後年の学校の前身となるほどの教育機能を有する必然性がなかったものと考えられる。

正安寺とは千曲川を挟んだ対岸で、佐久市南東の蓼科山の裾野の最下部に立地する龍泉院も教育機能への集約がさほど進行しなかったが、これも周囲の人口集積度合いによるものと考えられる。ただし両寺院とも地域教育と決して無縁ではない。正安寺住職によれば、かつては寺子屋を開いていた形跡があり、1980年頃までは学生の座禅会が盛んに行われていたという。また龍泉院では先代が教員であったほか、現在の住職は教育学部出身であり、40年ほど前の子供達は寺で勉強していたという。後年、村立保育園ができてからはこちらへ機能が移転したものの、一時は3年ほど衆寮を保育園としたことにも言及があった。

これら山麓部に立地する寺院に比べて野沢の平地に立地する本覚寺と種月院は対照的な特徴をも

つ。本覚寺では野沢の中心部で人口集積があり、江戸時代は比較的大規模な寺子屋をしていたことが判明している。また先代は教員であり、2000年頃までは近隣の子供が勉学の合宿を行っていた。種月寺も寺子屋をしていたことがあり、敷地内には往時を偲ばせる筆塚が建っている。明治以降、現在の住職まで代々教員の家系であったが、住職と教員の兼業が困難になった現在、住職は保護司などを引き受けている。

主な年中行事を個別に挙げると、正安寺の年中行事には元旦の初詣・祈祷、3月に入学児童祈願および彼岸、5月に大般若祈祷および花祭り、仏教婦人会総会、7月に一夜接心会、8月に盂蘭盆会、9月に彼岸、12月31日から元旦にかけての年越しがある。

貞祥寺を本寺とする龍泉院では5月の花祭り、8月15日の施食会と棚経などがある。また随時、交通安全祈願などを行う。龍泉院が属する組寺内では以前、施餓鬼会を組寺内で日替わりに行っていたものの、現在は各寺院が個別に行っている。

本覚寺では4月に出世地藏尊供養がある。これは近隣住民が講を組んで行っていたものであるが、近年は高齢化により実施されないことが多い。また5月に花祭りと稚児行列を行う。なお前述の通り稚児行列は佐久市内において地域輪番制で行われる超宗派的の行事である。本覚寺では花祭りに「やしょうま」と呼ばれる棒状の餅を一口大に切ったものを撒く。また同月5日には新生児法要、8月5日には建立者の命日を記念した施食会を行う。佐久を中心とした地域に特徴的な位牌分けの風習により、各家庭には多くの位牌が存在するが、これらの位牌を供養する「棚経」を旧盆の8月13日～8月15日に行う。

これら曹洞宗寺院への聞き取りから得られた主要な年中行事のうち、年越しと正月の法要、5月の花祭りと稚児行列、8月の盂蘭盆会、施餓鬼会と棚経、また時期は異なるが新入学児童の安全祈願は曹洞宗寺院としてある程度共通性を持つといえよう。しかし種月院ではこれらの他に、可能な限り地域住民や檀家との接点を設けようという住

職の意向を反映し、いくつかの独自の行事が行われている。一例を挙げると、佐久地方で慣例的に実施されている8月1日の墓参日には全檀家が寺に集まることから、本堂で芸術展を開催するほか、秋には佐久市のコスモス祭りに合わせて寺院を解放するイベントが開催される。

組寺以外に寺院が関連する組織として、各寺院の護寺会や婦人会が挙げられる。護寺会の中には秋に本山から和尚を招き人権学習および親睦会を行う寺院もある。

4) 天台宗

比叡山延暦寺を本山とする天台宗は、真言宗とともに古くから繁栄した宗派である。市内においては、香坂の明泉寺は8世紀前半に創建されたと伝えられるなど長い歴史を有している。

調査対象地域では2寺が確認された。そのうち群馬と佐久を結ぶ街道を見下ろす内山の山の中腹に立地する長福寺は1186年の創建である。拝殿外幕には武田家の紋である「武田菱」があしらわれており、街道沿いという立地の特性を物語る。

これに対して中込の平地に立地する正楽寺は寺請制度による寺院新設が窺われる1635年に建立された。無住の時代もあったが周辺地域では比較的長い歴史を有する。別当として神官も兼務していたことがあるほか、寺院自体は上野寛永寺の直系末寺にあたる。千曲川氾濫以前は現在よりも川寄りに立地していたことが住職への聞き取りから得られた。佐久甲州街道にほど近い正楽寺の拝殿外幕にも「武田菱」があしらわれている。

長福寺の住職は民間企業を定年退職した後、数年前に寺院を継いだため、地域の教育面においては他の寺院の住職ほどの役割を担っていない。他方、正楽寺の住職はPTAの役職、青少年補導員、保護司等を経験している。長福寺の先代は教員であり、正楽寺の先代は地域住民に対して書道教室などを通じた教育的サービスを提供していた。

長福寺の主要な年中行事には8月中旬の地藏盆会、9月中旬に観光協会と協働する「コスモス音楽会」、12月31日の年越しと焚上が挙げられる。

正楽寺においても音楽祭を除いてほぼ同様であったが、5月の花祭り及び毎月第3日曜日の写経について言及があった。

長福寺では、寺は檀家のものである（檀家寺）という現在の住職の考えが反映されている。一例を挙げると檀徒（檀家と信徒）の当主が主体となり檀徒会を形成し、その檀徒会の総代10名が住職の依頼によって除草作業を年4回、本堂掃除を年2回、および畑作業など、寺の維持管理に協力するという。また総代会と檀徒総会が4月に開催される。現在の長福寺は末寺1寺と組寺関係にあるが、以前は4寺の末寺があった。

正楽寺では護善会以外の組織として、天台宗佐久部会に関する言及があった。部会では地区の代表者が年3～4回ほど善光寺で会議を行う。また部会内は葬儀時の人員確保などにおいて互助的機能を有することが判明した。

5) 日蓮宗

日蓮宗は身延山久遠寺を総本山とする。佐久市内では中込の橋場地区にある大立庵教会一軒のみが該当する。大立庵は佐久市内では最も新しい寺院である。昭和41年時点では布教所であったが、東御市にある日蓮宗の本寺の紹介で先代が入職したことに始まる。当寺は本来千曲川の最前面に位置し、古くから水害供養のための小堂が建立されていたという由緒を持つ。

大立庵は祈祷寺であり、年中行事にもその特徴が反映されている。元旦に初祈祷、2月3日あたりの日曜日には節分、12月中旬には星祭を行い、翌年の星辰の吉凶をみる。節分と星祭は大規模に催され、前者は例年200人ほどが参加し、後者は年内に1000人分の祈願がなされる。お彼岸の供養などは随時行われるほか、春の花祭りや秋の七五三の祈祷には近所の病院の託児所の子供も招待する。

日蓮宗は長野県内で主に3区分されるが、大立庵は東北信グループを形成する15寺のひとつである。グループ内では10月13日に開催される日蓮上人の「お会式法要」を手伝うほか、若手を中心と

した勉強会と法要講習を年1回行う。4年ごとに県内信徒が集まる護法大会にも参加する。寺院には檀信徒集会が行われる。

Ⅲ 文化の拠点としての仏教寺院—江戸期の地域的「核」として—

仏教寺院は織豊政権の全国的な仏教勢力抑圧のためにその軍事的な性格を失い、徳川時代には宗門改によって現代の戸籍管理に相当する地方における行政機能の一端を担う存在へと変質する。その機能は単なる戸籍管理にとどまらず、初等教育から各種行事の執行、あるいは各種産業の監督と技術指導等、現在の地方行政機能全般に及ぶものである。更に、神仏分離令以前の当時は一般に神社が一境内中に融合している場合も多々あり、地域の信仰をも管理していたといえる。つまるところ、それはある種の地域的「核」としての機能を有していたのである。そしてこうした仏教寺院の一般的な性質は佐久市中心部においても同様に確認されるものであった。否、調査の結果を鑑みるならば、この種の一般的認識よりも密に地域全体を支える機関であったと見るべきであろう。本章では、研究対象地域における江戸期以前の仏教寺院の文化の拠点としての性質を、調査結果より垣間見られる範囲で考察する。

Ⅲ-1 「供養」を通じた情報集約機能

近世の仏教寺院が行政機能を請け負っていたとはいえ、その本質は当然ながら仏説成就を本懐とする宗教施設であった。そのため、寺院と地域の関係において第一に行われるべきは、衆生の「供養」ということになる。それが本来僧侶や亡者に対する施物を主とした純然たる宗教行事であることは言うまでもない。ところが、佐久市中心部においては、この「供養」が寺院の地域的「核」としての機能を形成していたのである。以下、この点について述べる。

まず、調査事例に言及する前に、何故「供養」と地域文化が結合するののかについて説明しておく

必要があるだろう。それは日本仏教の独特の特徴、「草木国土悉皆成仏」という涅槃經の文言に象徴される思想に関わるものである。これは蠢動含靈あらゆる動物のみならず、草木のごとき植物一般も、あるいは国土のような非生物・非実体的存在さえも等しく仏性を具えており、最終的には仏となり得るということを意味している。この思想は神道とも相通ずる所があったためか、我が国においては極めて広範に受け入れられ、空海から鎌倉新仏教の唱道者各々に至るまでの高僧らによって教派の別なく説かれている。この思想に従えば、家畜は固より蚕のような昆虫類から五穀等の農産物、あるいは農地そのものやそれに用いられる道具類さえ成仏し得る者となり、人間と同様の「供養」が必要となる。そして実際に、現在に至ってもなお、「針供養から、魚供養、包丁供養、眼鏡供養、時計供養まで（阿部、2006、142頁）」に及ぶ広範な「供養」が寺院において執り行われているのである。しかし、江戸期における「供養」は現在のような純然たる宗教行事としての性格を持つ以上のものであった。当時の寺院は前述の通り戸籍管理を担う行政機関でもあったのである。かつ、それは後述するように寺子屋の主体を為す地域の知的指導者でもあった。それゆえ、大陸伝来の農書を用いた技術指導のような役割を有していたとも十分に考えられるのである。そればかりか、多様な産業の「供養」を行うことによって、それぞれの産業技術に関する情報が寺院に集積していた可能性も少なからずある。

こうした観点の下、調査結果から佐久市中心部における「供養」の実態を推察すると、まず養蚕、養鯉業と稲作との関係上興味深い点が存在する。これら蚕と鯉に対する供養を行うという事例は、主に貞祥寺や龍泉院などの曹洞宗寺院において確認された。その所領、あるいは檀家の所有する水田では鯉を養殖するが、かつてはその餌として生糸を取り終わった蚕を用いたという。そして貪婪な性質を持つ鯉は蚕のみならず水田中の害虫をも食するため、自然農薬さながらの効果を持ち、更には大量の餌の消化によって肥料をももたらすと

いう。このように、佐久市域の水田においては稲と鯉と蚕を利用した無駄のない農法が実行され、寒冷な気候と瘠せた地味を持つ当地において最大限の収量を得ていたのである。しかし、こうした技術は無論自然発生的なものとは考え難い。第一、鯉食自体が大陸発祥の文化であり、書物等を介さずしての移入は不可能である。また、それらを複合的に組み合わせた農法の開発にはそれぞれの生物とその利用法についての総合的な知識が必要となるのは言うまでもない。そして、先進技術や知識を得ることができ、更に稲作・養鯉・養蚕の情報を統合し、かつ現地の条件に適合するような農法の改良に携わり得る存在は、ただ仏教寺院のみであったのである。そもそも佐久市一帯において卓越する曹洞宗は元来学術的な性格を持ち、中国文化の輸入にも積極的な宗派である。この稲作と養蚕鯉業を結びつけた技法の他にも、佐久市中には味噌の製法の伝来に尽力した僧侶を輩出したと伝えられる安養寺が存在し、ここもまた曹洞宗に属す寺院である。また、小林（1976）にもあるように、長野県の養蚕業の発達には寺子屋での初等教育が功を奏しているとされ、寺院の教育機能の影響も無視できない。加えて、養鯉が旧所領を主とする寺院周辺の水田において現在でも行われ続けていることも特筆に値しよう（上記の禅寺の他、西方寺が著名である）。こうした点を省みれば、仏教寺院による農作物の「供養」を通じての情報集約と、書物による先進技術の導入が、佐久独特の食文化と産業を生んだとも考えられるのである。

「供養」の現実的な効用は産業以外の部分でも多分に認められる。その代表が「戌の満水」という大水害に関する供養の風習である。

佐久市を貫通する千曲川はかつて洪水を繰り返して、住民を苦しめた暴れ川であった。江戸後期から明治にかけての200年間で田畑流出は40回を超え、中でも1742（寛保2）年の洪水では大きな被害が出た。このときの洪水は戌の満水と呼ばれ、特に8月1日の被害が甚大であったと言う。流域全体で2,800人以上の犠牲者を出し、田畑の流出

も広範囲に渡る未曾有の大災害であったといわれている。佐久市一带には現在でも盆の墓参りとは別に、その犠牲者供養のためこの8月1日に墓参りをする風習が残っており、地域周辺の小中学校や会社も特別の休日となるほどである。更に、これに基づく位牌分けという風習も存在している。位牌分けとは、別々に暮らす家族がそれぞれの家庭で供養ができるように位牌を複数作ることをいうが、これは洪水による無縁仏の発生を防ぐためのものであると考えられている。

これらの供養が産業に関わるものとは性格を違えていることは言うまでもないだろう。墓参り、位牌分けのいずれもあくまで災害によって失われた人命を悼むことを本質とするものであって、寺院のみならず住民も自主的に行うような、必ずしも宗教的な背景を有するものではないからである。しかし、実際には仏教寺院とこれらの風習の関係は非常に強いもので、調査対象のほぼ全ての寺院において8月1日、あるいは彼岸などに水害の供養を行い、また盂蘭盆には「棚経」という位牌に対する供養も為される。中には寺院の由緒自体がこの洪水の供養に始まるという例も存在するほどである。そしてこの「供養」は単に人命を悼み無縁仏の発生を防ぐばかりに終わるものではない。その機能の最たるものは、まさにこの「戊の満水」という大水害が記録され、水害から270年以上隔たる現在に至っても地域住民全体に限なく伝えられているという事実存している。それは防災の重要性を何よりも語り、地域全体の防災意識をこれ以上ない程に高めるものである。また位牌分けは戸籍管理上の混乱を防ぐ機能も持ち合わせよう。これはいずれも現在の行政の担う役割とそう遠いものではないのは関東大震災の発生日を防災の日と定めていることを考えれば容易に理解できよう。佐久における水害「供養」は、被害状況や犠牲者数のような情報を集約できる寺院であればこそ可能な、ある種の防災機能を兼ねる行事なのである。

以上、佐久市中心部において「供養」が地域文化の核、あるいはその基盤として作用しているこ

とを述べた。それはある時は各種産業に対する技術指導であり、また避難訓練に通ずるような防災行事であった。それは行政機能と違って差し支えないものであって、種々の情報の集約点である寺院であればこそ担い得たのである。

Ⅲ-2 地域への帰属意識の形成機能

現代における帰属意識を考える場合、それは都道府県・市町村等、基本的には行政区画に依拠するものであり、人々の意識もそれに対して向けられる。しかし、江戸期においては各戸は檀那寺に所属するものであり、その帰属意識も第一には藩に、その下位には寺社に向けられていたと考えられる。それは行政機能、特に戸籍管理を行う機関が中心になっているという点では現在とも相同ではある。ここでは、佐久市中心部の仏教寺院が果たした帰属意識の形成と、それによる地域の結束の強化について述べる。

まず、地域の結束や帰属意識の形成を最も単純な形で育むものが、地域における祭礼である。佐久市中心部の寺院においても、当然ながら様々な祭礼行事が執り行われてきた。それは前節に述べた「供養」であることもあれば、それ以上に享樂的なものも存在する。こうした祭礼は生活と密接に結び付きながら、ごく自然に当地への帰属を自認させ、参加者間に同胞としての意識を生じさせるものである。そしてそれは現在に比しても実に盛大な規模を有していたことは聞き取り調査からも明らかで、帰属意識を強化するに足るものであったことは想像に難くない。

佐久市中心部において執り行われていた行事の中でも特に規模の大きなものが、貞祥寺の組寺による施餓鬼会（施食会）であった。この行事は新暦8月2日に萬得寺に始まり、棚経が行われ、翌日以降も主催の組寺を代えながら続けられるものである。8月14日に貞祥寺に至り、15日に龍泉院が担当していたという。そして、各寺院において棚経が為される際には、寺院の所在する地域において講のような組織の構成員が集い食事を振る舞うのである。また、この期間中は出店などもあり、

地域住民は祭礼を楽しんだという。この行事は、主旨こそ違えど、卯田ほか(2013)にある富山県のゴエイサマ迎えと類似した構造を持ち、かつては地域住民としての実感を与えるものであったと考えられる。殊に当地に卓越する曹洞宗寺院の組寺の所在する範囲において連日行われるこの祭礼は、その地域一帯の結束を強化して余りあるものであっただろう。

しかし、佐久市中心部において行われた祭礼の中でも何より特筆すべきものは、跡部地区に伝わる「踊念仏」である。踊念仏は時宗の開祖一遍が1279年に佐久郡伴野の地において初めて行ったとされる。そしてこれこそが時宗そのものの始まりでもあった。確実な記録としては1850年頃の「助念仏」に遡ることができる。当時80村以上が物資を持ち寄って三日三晩踊り狂い上人を迎えたとされる。これは牧野(1969)に「佐久郡の踊念佛の結衆は、同郡各地の村落共同体において組織された念佛講が一単位となり踊念佛の道場に参加(140頁)」していたとあるように、佐久市一円の村落が結集して開催するものであり、跡部地区、あるいは旧中込村、野沢村の範囲に止まらず、現在の佐久市への帰属意識の根幹を形成していたとも目されるのである。現在佐久市一帯に踊念仏に類似した地方習俗が時宗とは無関係とされながらも残存しており、かつての帰属意識がなお顕在化しながら伝えられていると考えることも可能である。

このように、当地の寺院は盛大な祭礼とともに住民の結束を高め、生活の中で帰属意識を培養していたのである。しかし、帰属意識というものはこうした日用彝倫の裡に自ずから育まれるものばかりでもない。実際、寺院における教育、即ち寺子屋においても、多分に地域への帰属を強化する要素が認められるのである。吉原(1969)には、寺子屋において教科書として用いられた「往来物」が「近世になると…郷土の誇りをうたいあげた往来が、続々編纂・刊行されるようになった(22頁)」とあり、また、「このような往来は、多分に郷土意識が根底となって編纂されたと思われるし、郷土への愛着と郷土に住む人間としての自覚をつち

かう郷土愛を保持させたと思われる(24頁)」とされている。また、戸田(1974)も地理的往来を寺子屋で用いたことについて、「教育に当たって郷土というに値するものを顧慮していた表れと指摘せざるを得ない(22頁)」という。今回の聞き取り調査ではこうした教育内容の確認には至らなかったが、吉原の載せる郷土往来物の一覧の裡に「善光寺詣」なるものが存在することなどから、佐久中心部においてもこうした書物が用いられたことは十分に想定される。とすれば、地域への帰属意識は、こうした教育を通じて大いに発達したのではないかと考えられるのである。

以上のように、研究対象地域においては、寺院における祭礼と教育によって帰属意識の形成と地域の結束が行われていたことを確認した。それは、江戸期において、寺院が物質面のみならず精神的な部分においても地域文化の核であったことを示している。

Ⅲ-3 寺子屋による教育的機能

近世日本の教育機関には藩校、郷校のような官営のものと私塾や寺子屋などの私営のものが存在したが、基本的に初等教育は寺子屋に一任されていたといえ、その他のものは現在の高等教育に相当する学問を教授する機関であった。そのため、一般には武士や農民の別なく寺子屋において文字を学んだと言われている。この寺子屋の端緒は鎌倉時代にあるとされ、室町時代以降発展し、江戸時代に至っては僧侶のみならず、武士や神職、あるいは浪人や町人であっても師匠となるほどに普遍的な存在であった(吉原, 1969)。量的にも19世紀以降急増しており、明治初期の学制施行直前には全国に16,000箇所を数えている。

このように、江戸期における寺子屋は初等教育を司る機関として全国に展開していたのであるが、寺子屋という名称は室町時代の名残であり、徳川の治世においては必ずしも寺院のみが初等教育を担った訳ではなかったのである。とはいえ、それは寺院と教育の乖離を意味するものではなく、仏教寺院は依然寺子屋を有する最も普通の施

設であり、全国的な教育への注力に伴い、その母数は明治に至るまで常に増え続けたのであった。

佐久市中心部においても、やはり寺院における初等教育は盛んであったようである。学制発布に伴う旧中込学校の母体となった小林寺を始め、同中込の種月院、野沢の本覚寺、専立院については寺子屋を開いていた記録が存在し、正安寺や金台寺にも筆塚らしきものがあり、その可能性が高いという。また、これらの寺院は概ね町中に存在し、一方で寺子屋ではなかったと明言する寺院は山腹に所在する場合がほとんどであった。要するに教育を受けさせるべき対象である童子が居住するか否かが寺子屋経営の簡略な基準であったのである。例えば本覚寺は野沢の中心集落に位置しており、かつては付近への移住も度々あり、檀家には所属しない「信徒」も多数認められる。それは寺子屋としても多くの子弟が流入することを意味しており、都市化とともに一寺院が初等教育機関として重要性を増していく様を窺い得よう。また、寺子屋の師匠は当時一般に非常な崇敬を受けており、実際に地域一帯の知性を牽引する人物がその職に就くことも稀ではなかった（乙武、1936）。例えば小林寺には「浣筆泉碑」という石碑が残っているが、これは佐久の傑人と謳われた良慶（雲巢）によるものであり、寺子屋の繁栄を祈願した文章が刻み込まれている。良慶はその他にも弘法大師一千年忌を記念する碑を建てており、彼の才覚豊かなことは有名であったらしい。ともかく、この良慶のごとく、寺子屋において教授に携わる者は詩書禮樂に通じた当代の文人であったのである。

なお、この小林寺をはじめとして、明治以降も寺院と教育の関係は密である。小林寺は明治の学制発布に伴い中込学校が建設されるまでの間、寺子屋を成知学校と改称して代用しており、初代中込学校校長も同族内から選出されている。その他、調査を行った寺院においても、そのほとんどが教育者の家系に生まれていることも分かっている。ある住職は、旧信濃師範学校には相当数の仏教関係者が在籍しており、仏教者としても教育者とし

ても知己の人物が多くあると語っていた。いずれにせよ、Ⅲの1、Ⅲの2に見られる寺院の機能にも寺子屋が関係している通り、仏教寺院は地域の教育機能を司る知的中心でもあったのである。

以上、本章では近世における佐久市中心部の仏教寺院が地域の核として、「供養」を通じた情報集約・技術指導・あるいは防災拠点の機能を有し、また祭礼によって地域の結束を強め、帰属意識を形成し、寺子屋による教育によって住民の知識を向上させると共に前二者を補完するという、現代の行政機能と相似した存在であったことを確認した。仏教寺院は檀家制度による戸籍管理にとどまらない広範な機能によって、中込・野沢両地区の原型を作りだしていたのである。次章では、明治政府の政策によってこの仏教寺院の機能の変遷を余儀なくされる姿を、現在の寺院の状況から描出する。

Ⅳ 仏教寺院の機能変遷—明治以降の「辺縁化」—

前章で見たように、江戸期における仏教寺院は地域の文化機能が集約する行政的施設であった。しかし、明治に入るとともに、西欧に倣った「国教」たる国家神道の整備が推し進められ、神仏分離令の施行とそれに伴う外来宗教の排斥運動が展開されることになる。そして、その外来宗教とは国内において強勢を誇り続けた西来の宗教、仏教を指すのであった。日本の仏教組織は、この「廃仏毀釈」と呼ばれる運動を通してその性質の転換、特にその機能の辺縁化を余儀なくされたのである。それは本研究が対象とするような市町村規模、あるいはそれ以下の微小な地域であっても例外ではなく、現在の佐久市中心部の仏教寺院でさえも明治期の辺縁化の余波を受け続けていると言える。以下、聞き取り調査より明らかになった明治以降の仏教寺院の機能上の変遷を考察する。

Ⅳ-1 地域コミュニティの中心としての寺院

廃仏毀釈による打撃は仏教全体を覆ったが、佐久市中心部の仏教文化に対しては、第一にその「供

養」による情報集約機能，即ち地域全体に適当な文化と技術を涵養する知的基盤としての役割を奪う結果となった。新政府の制度が寺院と地域の関係を強力に遮断したためである。農地改革による産業の基盤たる所領の剥奪などはその典型例と言えよう。聞き取り調査においても，ほとんどの寺院において明治期における農地の接収が確認され，それに伴い米作や養蚕業，養鯉業との関係も薄れたという意見が多々聞かれた。先述の寺院と教職との強い関わりさえ，農地収入の減少による経済基盤の弱体化に起因すると認識されている程である。更には前章で述べたような寺子屋の師匠，地域の知性の牽引者という立場もこれに伴い消滅している。そこにはかつての行政中心は存在しないのである。

しかし，徳川の270年に及ぶ治世の中で確立した機能は一朝一夕に崩れ去るほど脆弱なものではなかった。かつての「供養」は確かに現在ではより純粋な儀式となっている。産業や防災との関わりも比較するべくもないほどに減少したのも疑いはない。ところが，その本質である，地域との交流，住民との情報交換という機能について見た場合，それは未だ大いに残存しているのである。例えば，中込の種月院においては8月1日に前章に述べた「戌の満水」の供養を行うが，この際に地域住民の美術作品の展覧会を開くなどしており，また毎月二回写経会を行い，高校生から90歳以上に渡る幅広い年齢層の参加者があるという。三家の正楽寺においてはかつて周辺住民が琴の練習場として使用していたという話も聞かれ，現在も住民が近所づきあいの的に寺院を訪れるという。更に，多くの寺院で付近の児童が学習のために本堂を用いる例も確認された。また，多くの僧侶が民生委員として活動しているという事実もある。

寺院のこのような地域コミュニティの中心としての役割は，檀家の大半が近隣住民であることと関係するようである。これは檀家制度が実質的な戸籍管理制度であったことに由来し，寺院と檀家の関係は主に居住地で決定されてしまう。それゆえ，元来信仰集団としての性格が薄いために，現

在に至ってはほとんど公民館的な機能を得る結果となったのであろう。その機能は，かつての地域の文化的核となるほど重要ではないものの，住民の日常的な情報の集約する場であることには違いない。つまり，江戸期から明治に至り，集約される情報が，行政上の中核となるものから，より辺縁的なものへと変質したのである。それは一見すれば不連続であるものの，情報集約という点からみれば，機能の大体は保存されているということになる。

IV-2 アイデンティティ確認のための年中行事

その享乐的な性格上，行政機能ほどの打撃を受けなかった祭礼による地域結束と帰属意識醸成の機能も，時とともに消滅に瀕しているのは言うまでもない。かつて研究対象地域一帯で幾週にも渡って催された施餓鬼会も現在では各寺院個別での開催となり，佐久市一帯の住民が集った踊念仏も今や跡部地区において保存されているのみとなってしまっている。現在の住民の帰属意識は仏教文化とは無関係に，恐らくは公教育や日常生活を基に漠然と作りだされていると予想される。そこに祭礼が介在する余地はないのである。

それでは，こうした祭礼，あるいは年中行事は意味を失ってしまったかと言えば，そうではない。現在も佐久市の寺院では多様な年中行事が執り行われている。例えば踊念仏などは，全国でもこの地にのみ伝わる貴重な存在である。この踊念仏については，1966年に跡部踊念仏保存会が結成されて以来，住民自らが管理と保存を行ってきた。現在は佐久市から支給される補助金により運営がなされている。2000年12月には国の重要無形民俗文化財に登録され，合併後は補助金も一律となり，運営も容易になったという。一方で，その継承については高齢化という問題に直面しており，新規継承者獲得に努めている。近年はその努力の甲斐もあり，退職を契機として参加する者も増えているという。また，2009年から「子供念仏」を夏季に行い，文化の周知に努めている。

この他，各寺院共通の行事として五月上旬の花

祭りが執り行われている。普通花祭りは釈尊の誕生を記念し四月八日に催されるが、研究対象地域では、地域の祭礼と融合し一か月ほど遅れるのだという。なお、この花祭りは佐久市の仏教婦人会が主体となって運営するもので、寺院の別、あるいは宗派の別を超えたものとなっている。

こうした例を見ると、佐久市中心部においては、大規模な年中行事の主体は寺院というよりも、寧ろかつてそういった祭礼で結束していた地域住民であるように思われる。つまり、現在の年中行事は、帰属意識や結束の強化ではなく、そこにかつて所属していた、あるいは所属しているというアイデンティティの確認を事としてしていると考えられるのである。この、帰属意識と結束の形成・強化からその確認への機能変遷は、情報集約機能と同様に、寺院が地域の文化的な核であるという立場を失ったことによる辺縁化と捉えられる。従って、この点においても、寺院の機能の本質は保存されていると見るべきであろう。

Ⅳ-3 補助的教育機能への移行

旧文化を徹底的に排斥する明治に入ってなお初等教育の中核であり続けた寺子屋も、1872（明治5）年の学制発布とともにいよいよ本格的な衰退の時代を迎える。その後1890（明治23）年、各自治体への小学校の設立が義務付けられ、1907（明治40）年には大衆の義務教育が制度化されると、もはや寺子屋は完全に過去の記憶として葬られてしまったのである。

しかし、これは事実の一側面を述べたものでしかない。日本全国、その都鄙を問わず初等教育を浸透させた寺子屋を排除し、数年で新たな教育機関を急造することは現実的に不可能であるのは誰の目にも明らかであろう。結局のところ、明治政府は寺子屋を他の建築物へ統合移転するといった形で初等教育を始めたのであった。ただし、それは寺子屋の存続を許すものでもなかったということも付記すべきであろう。松川・土本（1997）によれば、廃仏毀釈によって松本城下の25の仏教寺院の内、21が廃寺となり、またその内の6軒が学

校に転用されたというが、結局その転用された寺院のほとんどが再度教育機能を剥奪されて寺院に戻されている。つまり、寺院を一旦教育機能のみを有する施設へと変貌させた直後に、その機能のみを新たな学校に付与し、寺院と教育機能を截然と分断したのである。

こうした経緯による教育機能の辺縁化が佐久市においても同様に実行されていることも、前章に記述した小林寺の例（一時的に「成智学校」となった）を見れば容易に理解できる。そこには多分に寺子屋の要素も残存し、僧侶の家系との関係が断たれた訳でもないのではあるが、少なくとも寺院からは初等教育の機能それ自体は消失してしまったのである。それでは、寺院は教育とは無縁となってしまったのか、それもまた是とは答え難い問いである。聞き取り調査の結果を見ても、大半の寺院は補助的な教育機能を未だに有しており、いくつもの寺院においては、公教育側から種々の依頼を受けてさえいるのである。一例をあげると、専立寺は「昼間教室」と称して学校との連携を密接なものとしており、学校からの依頼によって、何らかの理由で登校不能となってしまった児童生徒に対する教育を行っている他、学習塾を経営している。同様の事例は種月院においても確認され、その他、正楽寺等の多くの寺院においても、住職ないしは副住職が保護司を務めているという事例が確認された。また、龍泉院のように一時期保育園を経営していた寺院も少なくない。大立庵は隣接する保育園や近隣の託児所、あるいはPTAと連携して「育成会」という行事を行っている。また、生涯学習についても積極的に、上述の専立寺や種月院をはじめとして、寺院において御詠歌、写經、座禅等を学ぶ地域住民も多い。

このように、現在の佐久市中心部における仏教寺院の有する教育機能は、公教育を補完する性格を持つものである。そこにはかつての寺子屋の盛況や知識面での牽引といった姿は認められないものの、やはりその辺縁部においてなお活発な機能を有しているのである。

以上、明治以降の仏教寺院の機能の変遷を追い、

地域の文化的核であった寺院が辺縁へと移行している状況を記述した。現在の寺院は江戸時代に有していたような権能を保っている訳ではないが、しかし当時の広汎な機能を踏襲しつつ、地域社会に不可欠な存在として活動を続けている。そしてそれらの機能は、例えば踊念仏が本来跡部という一地区に伝わる地域的なアイデンティティに関与するとともに、生涯教育としての側面を持ち合わせているように、地域コミュニティの中心として、互いに連携しあうものであった。

V 結論—仏教寺院の今後—

以上、本稿では、佐久市中心部、即ち旧中込町、野沢町を主とする地域において仏教寺院がどのような機能を有し、また変遷を経験したのかを述べた。

まず、IIでは佐久市およびその中心部の仏教寺院の歴史および地理的分布についての概要を説明した。それによって現在の当地の仏教寺院が自然条件から戦国期以降の政治、経済等の諸条件の反映であり、かつ独特のものであることが示された。

次いで、IIIでは、江戸期において仏教寺院が当地の地域文化の中核として機能していることを明らかにした。その機能は、「供養」による情報収集、祭礼による地域結束、寺子屋による初等教育という三類型に大別され、それらと戸籍管理を含む寺請制度との連動によって、一地域の文化的基盤を作り上げていたことを明らかにした。仏教寺院は農業、工業、商業の別を問わないあらゆるものの「供養」を行い、地域内外の情報を集約するとともに、新知見や外来技術による産業発達に関与していた。また水害供養とそれに関わる風習には明らかな防災効果が認められ、現代にあってもそれは無視しえないものとなっていた。そして寺院は地域祭礼の主催となることによって住民の結束を高め、帰属意識を強めていたことも理解された。更に寺子屋における初等教育は現代の公教育に等しい立場を持つばかりか、これらの成果を若年層に伝達する役割さえ担っていたのである。こ

れらの結果から見ると、江戸期以前の仏教寺院は研究対象地域における明らかな文化的「核」であったということができよう。

この結果を受け、IVでは、明治以降の仏教寺院について記述し、その文化的機能の現状を分析した。日本全国においてそうであったように、佐久市においても寺院は廃仏毀釈のためにそれまで有していた諸機能を奪われざるを得なかった。それは行政機能の剥奪に止まらず、寺領そのものの解放等財産にも及ぶもので、地域内の産業や教育、また行事との関係を破壊するものであった。そのために発生した現象が、文化的機能の「辺縁化」である。廃仏の波は確かに苛烈なものではあったが、仏教寺院と地域との結束はそれ以上に強固なもので、かつての文化的機能は弱まりながらも現在まで存続し続けていたのである。もはや「供養」による産業間の情報集約は認められないのは事実ではある。しかし依然として寺院は地域コミュニティの中心として住民生活に関わる情報が交換される拠点となっていた。また盛時の祭礼のようにはいかないにしても、たゆまず催される年中行事は、地域住民のアイデンティティ形成とコミュニティの一員としての自覚を促し、その確認の術となっている。そして公教育からは政教分離によって完全に切り離されながらも、それを補完する保護司などの役割や生涯教育の場として地域社会にはなお不可欠な機能を担っていた。これらは江戸期において地域の文化中心を形成していた仏教寺院が、明治に至って辺縁的な機能を担う存在へと変移したことを示すものと言えよう。そしてそれは地域文化の中心ではないにしろ、依然として地域内部に散在する多くのコミュニティを統べる役割を有する存在であった。即ち、現代の仏教寺院は江戸期に付与された諸特性を受け継いだ、地域コミュニティの中心なのである。

それでは、こうした機能変遷を遂げた寺院は、今後どのような変化を迎えるのであろうか。

聞き取り調査の中で、どの寺院においても耳にする共通認識として、「寺院の真の役割は、道徳、倫理、あるいは哲学に関する教育である」という

ものがある。寺子屋的な教育の復活についても大半が希望すると答えており、また実際にそうした補助的な教育を行っている寺院が少なからずあるのは既に述べた通りである。その他、若年の僧侶の間でこうした教育的な取り組みが活発になっているという声も聞かれた。調査の際に発された「僧侶として商売ではなく宗教者としての使命感と義務感によって動いている」「寺院および仏教はこれから教育的役割、特に学校教育から除外されているような本来の意味での道德教育を以て世に貢献するべきである」と考える。そしてそれが仏教の本来の形である」といった言葉は、凡そ佐久市中心部の僧侶の考えを代表するものといえよう。こ

のように、僧侶らにとっての仏教寺院の本領は、決して檀家制度や儒教儀礼と混淆した行政的なものではなく、寧ろ仏教の原型たる悟りと救いのための教学なのである。

現在、仏教寺院は明治以降の「辺縁化」を経てもなお、セレモニーホールの卓越や、人前式の流行によって、葬儀を主とする儀式的な機能の縮小を余儀なくされている。しかし、そうした逆境にあると、その真に志向する所は、今なお仏教の本懐そのものなのである。この、歳寒くして松柏の凋むるに後るを知るがごとき現状の報告を以て、本稿の結論としたい。

本研究を行うに当たり、佐久市各寺院の皆様、跡部踊念仏保存会会長の須江仁胤様、及び会員の皆様、佐久市役所の皆様には終始甚大なご援助とご協力を賜りました。末筆ながら、厚く御礼申し上げます。

[注]

- 1) 本研究では、中込・野沢両地区およびその周辺地域を「佐久市中心部」と表現する。佐久市には旧佐久市域に限っても中心地機能が岩村田に分散しているが、中込・野沢両地区が近接していることもあり、本研究においては両地区を中心機能が集約した地域と見做すこととした。
- 2) 甲州韮崎から八ヶ岳連山の麓を千曲川沿いに北上する街道。現在の国道141号線に相当。
- 3) 東京から長野までの開通時における旅客案内名称は長野新幹線。
- 4) 中部横断自動車道の建設中期間において更に1つのインターチェンジが開業予定。
- 5) 2014年4月1日現在。佐久市役所ホームページより。2014年8月1日最終閲覧。
- 6) 2014年7月1日現在。いずれも各市役所ホームページより。2014年8月1日最終閲覧。
- 7) 2012年2月1日現在。佐久市役所ホームページより。なおこの他に産業分類不能が1,610人存在する。2014年8月1日最終閲覧。
- 8) 納骨堂info。 <http://www.nokotsudo.info/index.html> 2014年8月1日最終閲覧。
- 9) 正安寺、龍雲寺など。『佐久市志 歴史編Ⅲ (近世)』,p747。
- 10) 佐久市役所ホームページより。2014年5月10日最終閲覧。
- 11) 伊藤利夫・白井正幸編 (2005) 『心の燈第二集』。12) 前掲8)

[文 献]

- 阿部謹也 (2006) : 『近代化と世間 私が見たヨーロッパと日本』。朝日新聞出版。
- 伊藤利夫・白井正幸編 (2005) : 『心の燈第二集』。佐久仏教会・佐久仏教婦人会。
- 卯田卓矢・益田理広・金 錦・細谷美紀・久保倫子・田林 明 (2013) : 入善町道市地区における浄土真宗の講組織の構造と維持要因 : 地区の社会構造に着目して。人文地理学研究, **33**, 67-86。
- 上杉妙子 (1991) : 長野県佐久地方の「位牌分け」。民俗学研究, **56**, 45-66。
- 乙竹岩造 (1936) : 明治前日本の児童教育。教育学研究, **4**, 1105-1134。
- 金児曉嗣 (1997) 『日本人の宗教性 オカゲとタタリの社会心理学』。新曜社。
- 小林重章 (1976) : 地域における実学の形成と洋学の移入 - 幕末・明治初年の長野県における教育の実態に即して -。教育学研究, **43**, 288-297。

- 佐久市志編纂委員会編（1992）『佐久市志 歴史編（三）近世』，佐久市。
- 佐久市志編纂委員会編（1988）『佐久市志 自然編』，佐久市。
- 島津俊之（1990）：奈良東山中「新西国三十三所」と村落間結合.歴史地理学, **151**, 1-15.
- 戸田金一（1974）：教育史における地域の問題地域教育史の意義. 教育学研究, **41**, 127-134.
- 藤村健一（2005）：宗教施設と社会集団との相互関係とその変化－福井県嶺北の寺院・道場の事例から. 地理学評論, **76**, 369-386.
- 牧野素山（1969）：信州佐久郡における遊行上人と念佛講. 印度佛教學研究, **17**, 585-586.
- 松川智一・土本俊和（1997）：松本城下町における寺院の転用計画:廃仏毀釈の都市計画的位罝. 日本建築学会計画系論文集, **495**, 215-222.
- 森正人（2001）：遍路道にみる宗教的意味の現代性－道をめぐるふたつの主体の活動を中心に. 人文地理, **53**, 173-189.
- 森正人（2002）：近代における空間の編成と四国遍路の変容-両大戦間期を中心に. 人文地理, **54**, 535-556.
- 吉原芳弘（1969）：近世の寺子屋における往来物による郷土地理教育について. 新地理, **16**, 19-30.